

○アイラトビカヅラの果実 (大井次三郎) Jisaburo OHWI: The fruits of Japanese *Mucuna*

アイラトビカヅラは熊本県鹿本郡菊鹿村の相良寺にあるマメ科の一種で、これには由来の伝説もあって中支産の油麻藤 *Mucuna sempervirens* Hemsl. とする説と、日本の固有種で *Mucuna japonica* Nakai とすべきものとする両説がある。この類では花のみならず果実にも特徴があるが、この植物では自然には未だ果実を結ばないで、果実も考慮にいれてその異同をはっきりさせることができなかつた。近年大内山茂樹氏によって種子島の馬毛島にも近縁のウヅルカンダ *Mucuna irukanda* Ohwi があるのが知られたが、これも氏の努力にもかかわらず同島ではまだ結実しない。

熊本大学薬学部の浜田善利氏は昨年5月に多数の花の人工授精を行うと同時に植物ホルモンそのほかも用いて、ようやくただ1個の果実を実らせることに成功、9月末に採取して一部を熊本大学に試験のために残し、他を筆者にめぐまれた。全長42cm位、硬刺毛は脱落してしまつて見ることができず、ただ全面に暗褐色のピロード様の毛を被り、両縁はわづかに厚く、種子の上は膨れ、巾3.5cm位、種子間のくびれの所では(1—)2cmほどである。種子は大形のソラマメ大(3×2.3cm)、両面は平らで暗灰褐色をおび、縁はその全周の $\frac{3}{4}$ を、巾3mm位のピロード状の暗褐色の臍でかこまれている。これらの詳細はいづれ熊本大学薬学部の紀要に出版されるはずであ

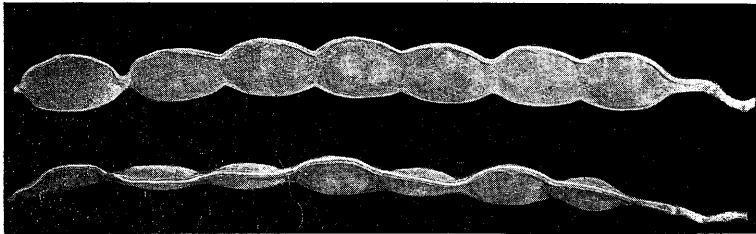
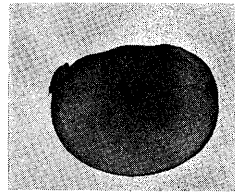


図1. アイラトビカヅラの種子(上)と果実(下)。

る。*Mucuna sempervirens* Hemsl. in Journ. Linn. Soc. Bot. 23: 190 (1887) の原記載および Curtis' Bot. Mag. t. 7978 (1904) の図の説明とによくあてはまるので、やはりこれと同種であると思はれる。

終りに浜田善利氏および写真の一部を撮影された大房剛氏に深謝する。

(国立科学博物館)